

朽ちない言葉

「人は皆、草のようで、その華やかさはすべて、草の花のようだ。

草は枯れ、花は散る。

しかし、主の言葉は永遠に変わることがない」

預言者イザヤの取り次いだことばを、ペテロは、小アジアの各地に流れ着いて新しく生活を始めようとしていたキリスト者たちに送ります。彼らは1章1節に「ディアスポラのパレピデーモス」な人々、「離散して仮住まいをしている選ばれた人たち」と呼びかけられます。すなわち、神の恵みによってナザレのイエスに出会うことが許され、この方をキリストと告白し、神の子とされた結果、地上的には生まれ故郷と父の家を喪った人々、地上にあるものではなく、天に蓄えられている朽ちることも萎むことも汚れることもない資産を受け継ぐ神の国の世継ぎとされた人々です。彼らは難民状態となって遠い異郷の地に流れてきたのですが、イエスさまを救い主として頂いたことで新しい存在に上書きされている。その神が与えてくださった新しい恵みの現実に向かって、この生き生きとした希望を受け継ぐために、それに応える新しい生き方を勧めます。救われる以前の彼らのありかたを「朽ちる種から生じた生活」と語り、いまや彼らは、「朽ちない種から、すなわち、神の変わることのない生きた言葉によって、あらたに生まれた」のだと宣言します。このことはすべてのキリスト者にあてはまる恵みの出来事です。わたしたちも「聖なる生活をしよう」というペテロの呼びかけに答えて、歩みを整えたく願っています。

今週、わたしはこの「朽ちる種からではなく、朽ちない種から、神の変わることのない生きた言葉によって新たに生まれた」という言葉について色々と思い巡らしていました。朽ちる種とは死で終わる

種であり、この地上のものをさすでしょう。いつときは華やかでも、最終的には死に引き渡されてゆく徒花(あだばな)、草は枯れ、花は散る、とイザヤの預言に引き継がれる地上の人間すべての現実です。しかし、神の憐れみがこの人間全ての現実を書き換えます。命の言葉、すなわち神の生ける言葉である主イエスとの出会いが救いの鍵です。良くも悪くもですが、わたしたちの存在は、言葉を抜きにして語ることはできません。わたしは言葉で出来ていると言ってもよいのかもしれませんが。考えれば考えるほどわたしたちは言葉をもたなければ、自分を自分として捉えたり、何かを表現したり、また他人の生み出した素晴らしい作品などを読むこともできないことに気付かされます。会話のためのコミュニケーションの道具として身につけた言葉のレベルから、知識として学習して獲得した言葉、それは専門知識だったり、先人たちが積み上げてきた技術であったり、叡智であったりするのですが、それもすべて言葉です。わたしが「わたし」と考える筋道もみな思考の道具として言葉を得たことによって、高度な思索を可能にしています。人から言葉が失われれば意思の疎通を始めとしたあらゆることが麻痺する。それは爪や牙をもたず、共同で社会生活をともに営むことでこの地球上で最強の存在になった人間という種の生存戦略をも危うくするものです。言葉によって、わたしはわたしになった。自分を獲得し、自分を取り巻く世界を認識していったのです。言葉はわたしたちを縛ったり、くくったりする見えない縄のようなものかもしれません。しかし、この言葉が朽ちるということも確かにあるのだらうと思わされます。言葉の鮮度というのでしょうか。手垢のついた言葉もあれば、使われすぎて実態を失ってしまった言葉もあります。たとえば愛とか、正義とか、平和とか、それらは林檎やハトのような触ったり、見たりすることの出来るものではない概念ではありますが、何を指すか大体のところをイメージはしています。しかし、それはわたしたち人間が神

から離れてしまった結果、きわめて利己的に判断されるようになって、神の愛、神の正義、神の平和というすべての人にあまねく与えられるものから、利己的な愛、プーチンの正義、ローマの平和といったような権力を持つ者によって利己的に、排他的に判断されるものに変わってしまっている。朽ちる種から生まれる言葉はそのように変質するものです。もう少し身近に引き寄せますと、ドキュメント 72 時間というわたしの好きな NHK の番組があるのですが、そのなかで小学校 3 年生のときに「バカ、死ね」と言われるようになり、それが 4 年生になっても続き、結局、学校にいなくなってしまった 10 歳の少年が出てきました。彼は、そういう言葉をもう一生聞きたくないなと思って、学校へ行くのを辞めたというのです。番組はイジメに踏み込む狙いのものでなかったのですがこの少年が写ったのもわずかでしたが、周囲から見守られ、良い言葉をもって成長してゆくことが願われている成長期に、存在を否定されるような言葉、人格を傷つけるような言葉をいつも聞くのは耐えられないというのはもっともなことです。人を育て、立ち上げる言葉ではなく、人を傷つけ、存在を否定する言葉をわたしたちは発することが出来てしまう。これも朽ちる種、人を朽ちさせ、枯らしてしまう言葉を、わたしたちのなかにある種が、罪が言わせてしまう。いろいろと考えさせられます。そして、わたしたちは、このような罪ある自分に死んだ存在なのです。イエス・キリストと出会い、この方を救い主として告白し、洗礼を受けたということは、自分が罪人であることを認め、神がわたしのために贈ってくださった救い主にみずからを委ね、洗礼によってキリストに結びつけられ、わたしの罪をキリストが十字架で処断された。キリストがわたしに変わって死なれ、罪を御自身の命のなかに飲みまれ、キリストを通して創造主である神を父と呼んで親しく交わり、神の助けを頂いて生きることが出来るようにされた。朽ちない種から、永遠につながる神の言葉と出会い、裁かれ、古

い自分のあり方に死んでキリストのうちによみがえった存在と自分を捉える。それがキリスト者です。「あなたがたは真理を受け入れて、魂を清め、偽りのない兄弟愛を抱くようになったのですから、清い心で深く愛し合いなさい。あなたは朽ちる種ではなく、朽ちない種から生まれたのですから」とペテロは噛んで含めるように、この神の憐れみと恵みによって新しい存在とされたキリスト者たちにふさわしい生き方を築くように語りかけています。それがあなたがたに告知された福音にもとづく生き方であるということです。それを新共同訳聖書は「聖なる生活をしよう」という小見出しでまとめています。聖なる生活は、聖なる方を知ること、聖なる方の言葉と出会うこと、この言葉を食べること、学ぶことによって始まります。わたしたちがどのようにして言葉を学習したか、日本語を使うようになった過程を思い出すことはできません。子どもや孫が与えられますと子育てを通して、ああ、こんなふうにして自分も言葉を獲得していったんだなあと感動させられますが、たとえば外国語、英語でもいいですがもうこれは中学高校大学とやるわけです。言葉を獲得するには何度も何度も反復練習するしかないですね。そうやって単語を覚え、語彙を増やしてゆく。ネイティブの人と話し、度胸や、アクセント、イントネーションなど、書物の言葉、文法だけではなく、生きた言葉を学ぶ。そうやって外国語はわたしたちの身についてゆくのではなかったでしょうか。では、神の言葉はどうでしょう。英語を学んだときほどに、神の言葉に触れ合っているのでしょうか。まず礼拝、とにかく御前に出ること、しかも生きた言葉を学ぶには礼拝のなかで御言葉の説き明かしを聴くことが大切です。説教のかたちで整えられた御言葉を聴くことで、わたしたちの群れが整えられます。教会という、主に召し集められた群れに語られる言葉のなかで、キリストに養われる。御言葉に聴くことでキリスト者は育てられるのです。わたしの信仰は、わたしたちの教会生活のなかで育てられるものです。ペテ

口はここで「あなたがたは真理を受け入れ、魂を清め、偽りのない兄弟愛を抱くようになったのですから、清い心で互いに愛し合いなさい」と勧めます。それはまずわたしではなく、キリスト・イエスが、わたしをそのように愛し、わたしを友と呼んでくださり、わたしのために命を捨てて下さった。この神さまの憐れみと恵みを味わうこと、繰り返し繰り返し、神の霊によって支えられて、この恵みを味わうことで身につけてゆくものです。同じように神を礼拝する兄弟姉妹とともに御言葉に聴くことで養われるのです。共同の歩みなのです。朽ちない言葉は神の言葉、ではその言葉を聴いてどうするか。英語ならば先生の発音のあとにオウム返しでわたしたちも単語や、フレーズを発音練習したと思います。おなじようにすればよい。御言葉を聴いたら「従う」ことです。自分の身を添わせることです。御言葉に自分を委ねるといいうい方もします。実は、このペテロの手紙の二番目のキーワードは「従う」ことだと読み進めていて気付かされています。救われた者として、さまざまな具体的な勧めがこのあと語られていくのですが、それをまとめてしまえば御言葉に従って、あなたの生活を形作りなさいということなのです。わたしたちはどうでしょうか。「従う」ことに自覚的でしょうか。様々な従い方がありません。自分に従う、人に従う、法律に従う、お上に従う、親に従う、いつけに従う、夫に従う、主人に従う。人生は選択の連続ですが、そのとき、わたしは、わたしたちは何に従って生きているのかをペテロは問いかけます。そして、わたしたちは、わたしたちに出会って下さった神の言葉、朽ちない種である主イエス・キリストの命の言葉に従って歩みを形作ろうというのがペテロの勧めなのです。

最後にもうひとつだけ、この手紙に書かれていることを理解するために大切なことは、わたしたちが当たり前のように過ごし、このままずっと続いていくと漠然と思っている時間が、じつは神さまに向かって、終わりに向かって進んでいる時間であり、創造から終末の

完成に至る神の時の枠組みのなかに置かれていることを弁えることです。聖霊によって、わたしたちの目を開いて頂き、この世界に生きるわたしたちの歩みが、神の裁きのもとに置かれていること、つまりキリストの十字架と地続きなのであり、神が良しとされた時に終りの完成に至らされるという聖書の告げる時間の枠組みのなかの住人となること、そのような時間の理解にわたしたちの軸足を移すことがなければ、本当の意味で、わたしたちが草花に譬えられ、神の言葉は永久に立つといわれたことの意味は捉えられないのではないかと思うのです。わたしは半田教会の主任になってから必ず教会暦の最後の主日、それまで教会学校で収穫感謝日として守られていた日を、終末主日として紹介し、リビング・ウィルを書くように促してきました。あれは与えられた1年のサイクルで神さまの御前に立つ命の刈り入れの日がくることを覚え、自分自身の終わりを、神さまが約束された終末の完成に重ねる訓練をしているのです。そのことによって神の約束の言葉を、わたしの日常に重ね合わせ、わたしたち自身を聖書の世界のなかに生きるものとする。ペテロの手紙を、聖書の御言葉を、わたしに、わたしたちの群れに与えられた福音、喜ばしいおとずれとして、ともに聴く。そのように人格と人生と共同体を作り上げるものとして神の言葉を受け入れる聴き方が、わたしたちを守り、活かすのです。このことを弁えて、神の到来を祈り願いつつ、わたしたちのこの週の歩みへと送りだされたいと願います。

お祈りいたします。